

# 地域立脚型国際交流と住民生活

—千葉県浦安市の調査研究—

## International-Exchange Based on the Community and Inhabitants' Life

—Investigation of Urayasu city, Chiba Prefecture—

渡辺 牧\*

Osamu Watanabe

### I 序

本研究は、社会学的視座から国際交流、国際協力と地域おこしについて調査研究することを究極目的としている<sup>(1)</sup>。本稿は、首都圏近郊の千葉県浦安市での調査研究に関するモノグラフである<sup>(2)</sup>。調査研究は1993年7月に始めた。調査方法は、(1)交流活動に参加する日本人、外国人住民、(2)自治体の国際交流部門の職員、(3)地域の教育機関のスタッフ、(4)自治体議員、(5)交流に関心はあるが、まだ参加していない住民へのインタビューと、文献・統計など資料調査を主としている。

### II 調査研究の作業仮説

#### II-1 アマチュアイズムと専門化

以下では、浦安調査のモノグラフ作成に当たった仮説を呈示しよう。

「自分が自分らしく生きたい」との生活者の願いは、国籍や民族を越えた普遍的なものである。住民参加型の国際交流は、文化的アイデンティティに根差しつつ、個々人の「主体の再生」への道に通じていよう。(Verhelst, T. 【1987→1994】)。国際協力をめぐる理論的枠組では、「代替的な開発」「住民中心の開発」

「対抗的な開発」「参加型開発」などの代替的パラダイムの検証を背後仮説としている。

(Oarkley, P. 【1991→1993】)。

政府レベルではODA(政府開発援助)、民間の非営利部門の活動ではNGOが、第3世界への国際協力活動を担っている。ODAは政府の政策体系の一環であり、伝統と実績、法人格をもつNGOは、目的意識を明確に抱いたリーダーのもとで活動しているケースが多い。国際協力が政策体系化、専門化されていくことは、分業化によるシステム形成を与件としよう。

だが、民間協力は多様であり、自発的ボランティア協力とは、インフォーマル・グループであるほど、不安定だが、はつらつと自由な活動ができよう。民間協力の源泉は、金や規則ではなく、人間の思いの凝集なのである。(中田 【1990:218】)。

国際協力の言わば「地下水脈」とは、日常生活の出会いと交流から構成されているのではないだろうか。社会運動における、しなやかな素人主義(アマチュアイズム)の大切さを、調査を通じてくみとりたい<sup>(3)</sup>。

#### II-2 日本人の生き方論

「国際協力のシステム化=制度化」とは異なる次元で、生身の人間として、第3世界に関わっ

\*基礎教養課程

てゆく人々の素朴な思いを、調査研究の主題としたい。開発においては物質的側面が重視されるあまり、住民が無視されてきたという近代化パラダイムの問題は、第3世界に限らず、日本社会の問題でもある。

榎田勝利氏の「NGOは自力で行動できる。問題は国際交流、ボランティアに参加したくとも契機が見つからない住民へのサポート体制の立ち遅れにある。従来、異文化と無縁だった住民が、気楽に異文化体験できるプログラムが必要」という発言は示唆に富む。

様々な日本社会の壁に、自らの生き方の可能性をふさがれ、苦しんでいる日本人にとって、在日外国人、異文化との出会いは、いかなる意味をもつのだろうか。

「世界との出会い」は、国内の立身出世主義、性差別、過疎過密などの状況を相対化して、新たな生き方を示唆する鏡の役割を果たそう。

### II-3 生き方の可変性とネットワーク

地域住民が国際交流に携わる有り様をみると、勤労者ならば仕事に支障がない程度で、余暇時間を活用することからスタートするケースが多い。持続するための仮説をあげよう。(1)学業、職業、家庭生活に支障が出ないよう、無理をしない参加形態。(2)個々人の自発性による参加。個々人の興味関心は多様であり、また変化してゆく。(3)生活者としてのネットワーク。国際交流の専門家をめざす訳ではない多くの住民にとって、交流に参加する仲間との出会い・応答・暮らしのなかでの助け合いは大切なものである。(4)開かれたネットワーク。福祉ボランティアから国際交流に関心を抱いたり、その逆のケースもあろう。(4)

### II-4 民間グループと自治体との役割分担

暮らしのなかでの交流活動には、国際交流協会、ボランティア・グループなどの民間団体と、自治体の役割分担が不可欠であろう。国際化

には明るい側面と、不法就労問題など暗い側面とがあり、後者に対しては、ときに強いられた形で対応してきた自治体と、善意により支援を続ける市民グループがある。外国人住民に対する市民運動、市民の情報やノウハウが住民意識を高め、行政を動かしてきた。自治体と住民の協力関係が、地域を変えていく(榎田【1994】)。(5)

自治体の窓口での外国語表記、自治体職員の外国語研修などによる外国人住民への行政サービス充実が期待される。住民の自発性に根差す交流活動に関して、自治体がいかなるスタンスで臨むべきかは、以下でみたい。

### II-5 地域特性

(1) 浦安市のような外国人住民の比率の高い地域と、そうではない地域、(2)あるいは鹿児島のように歴史的に異文化交流が盛んだった地域と、外部に閉鎖的だった地域とでは、交流の在り方について、一律に論ずることはできない。

都市部と農村部でも、交流の進め方は異なろう。地域の歴史と社会構造の分析を踏まえての、交流プログラム立案が問われよう。

## III 浦安市の地域実態

### III-1 埋め立てによる変容

1960年代以降、首都圏でも最大級の社会変動をみせたのが浦安市である。大規模ニュータウン建設は、マクロ構造的には、東京への人口集中の受け皿としての機能を果たしていった。同時に新旧住民のコミュニケーション促進、ソフト面での町づくりの多様なノウハウの蓄積、地域民主主義確立への模索が始まった。

浦安は江戸時代、半農半漁の村で、明治22年、町村制施行により「浦安村」となり、同42年に町となった。三方を海と川に囲まれた陸の孤島だったため、海苔やアサリ漁、塩田を生業とする人々が多かった。昭和39年からの海面埋め立て事業、44年の地下鉄開通により、都市化が急激に進み、56年、町から市になった。58年、東

京ディズニーランドが開園、63年にはJR京葉線が開通した。埋め立てによる造成地は市の行政面積の75%を占め、新住民が急増した。

### Ⅲ－２ 地域の国際化の背景

以下では、浦安市の国際化に関するデモグラフィックな実態をみよう。

(1)都心から近いこと、(2)埋め立てによる住宅の大量供給、(3)東京ディズニーランドなどの雇用機会の増加により、外国人登録をしている住民の占める割合は、平成5年3月には1.57%に達した。千葉市の比率1.08%などと比べても、この割合は高い。昭和63年には、浦安市の外国人住民比率は0.9%だった。

海外在住経験をもつ市民も増えている。帰国子女も、1992年度には、小学校319人、中学校103人、計422人となっている。主な海外在住国は、米国、イギリス、香港、シンガポール、ドイツ、フランス、中国、ブラジル、台湾、ベルギーの順。

市内には、1988年に明海大学と国際教育学院日本語学校が、93年に国際教育学院専門学校が設立された。93年には、明海大学には159人、国際教育学院日本語学校は65人、同専門学校は96人の留学生が学んでいる。留学生の出身国は、アジアの国々の比率が高い。

ディズニーランドの開園は、(1)外国人観光客が1984年に100万人を突破し、総入場者数の10%に達した、(2)国際級ホテルが1988年以降、次々にオープンし、客室数は3000室に達する、(3)外国人労働者の増加、(4)地域の国際的知名度を高めたという波及効果をもたらした。

### Ⅲ－３ 浦安市での国際交流の歩み

市は国際交流推進をめざし、1985年、通訳や翻訳のサポートを行う交流ボランティアの登録制度を始めた。ボランティアは93年現在、英語108人、中国語14人、フランス語9人、スペイン語7人の順で、計14言語、119人に達した。タガログ語、アラビア語、インドネシア語などと、言語の種類は幅広い。

これをきっかけに、翌86年、外国人どうしの親睦、地域住民との交流を目的に、「浦安在住外国人会」(U.F.R.A)が設立された。87年、市国際交流協会(U.I.F.A)が設立された。語学研修、比較文化研究、帰国子女、ホームステイ、都市交流、在住外国人交流、講演・シンポジウム、広報、総務の9委員会が発足した。その後、学生委員会も設ける。

市は87年、国際交流課を発足し、U.F.R.A、U.I.F.Aのサポート体制を築き始めた。

89年には、米国のオーランド市と姉妹都市提携を結んだ。同年、外国人3名(エジプト、ポーランド、台湾出身)のアドバイザーにより、外国人相談窓口を開いた。90年には、国際交流基金より、U.I.F.Aは地域振興賞を受賞した。

93年9月時点で、市内の外国人登録者は58か国、1917人で、6月時点のU.I.F.Aの会員は1449人、U.F.R.Aの会員は162人である。

外国人ホームステイ受入家庭などのため、U.I.F.Aは、インドネシア、アラビア、マレー、ペルシャを母国とする外国人住民、インドネシア語とマレーシア語のできる日本人住民などを講師として、外国語講座も開いている。

## Ⅳ アマチュアイズムからの志向性

### Ⅳ－１ 草の根の国際交流への意識一媒介としての自治体

日本では、多くの住民にとり、自治体行政をめぐる法律、条例、官僚制度は親しみやすいものとは言い難かった。70年代からの「住民参加の自治」運動も、(1)地域主権の視点の未成熟、(2)官民の役割分担の不明確さにより、遅滞している。政治的無関心が大都市などで広がる一方、「暮らしの場改善」への草の根の運動は、学童保育、お年寄りの福祉ケア、外国人との交流など地道に続けられた。草の根パワーとは、「素人主義」のエネルギーを源泉としているのではないだろうか。

官僚制度を支えている職員の人々も、職務を離れたら、ひとりの住民、親、青年といった

「生活者」である。生活者の声を、自治体に反映させていくために、浦安市は思い切ったスタンスをとった。

1988年、市民のS.T.さんが、浦安市の初代国際交流課長になった。(1)青年期に、世界を訪ねてのガイドの体験があり、異文化体験を重ねた、(2)U.I.F.A.の設立準備に1市民として参加したことが、民間から行政に入るきっかけとなった。

S.T.さんへのインタビューで、次の点が強調された。

(1) 行政の予算の増加、派手なイベントが、交流促進に単純にはつながらない。人の心は、日本人、外国人も同じであり、数字や形には現われにくい、だからこそ、心の問題をもっともみつめたい。

(2) 交流に参加した住民の人々が、いかに世界に視野を広げていけるか。少しずつ、市民の意識が高まっていくことに貢献したい。

(3) 国際交流をしやすい環境づくりは行政の仕事だが、住民の創意工夫こそ大切。行政は人の心を管理するのではなく、あくまで裏方、パイプ役としての機能が大切。市役所の各部門は、地域在住の外国人と共生してゆくという視点を大切にしたい。

S.T.さんは、「国際交流課の肩書がとれて、市民交流課に脱皮するのが夢。国籍に関係無く、みんなが住みよい町づくりをめざしたい」と語っている。国際交流課のオフィスには、U.I.F.A.、U.F.R.A.の事務局も同居し、多くの住民ボランティアがここを訪ね、打ち合わせ、広報資料プリント、住民への連絡・応答を行っている。行政と住民の不必要な垣根はなるべく低くし、住民参加型の交流をめざす姿勢がみられる。

## IV-2 住民ボランティアの活動と意識

### IV-2-1 J.S.さんへのインタビューから

U.I.F.A.のホームステイ委員会でボランティアをしているJ.S.さんは34歳の主婦で、小学生の子供2人がいる。インタビューでは、次の点が明らかになった。

(1) 7年前、U.I.F.A.ができたとき、説明を聞きに来たが、「土曜日曜の活動が多い」と言われ、幼児がおり断念した。国際交流は、自己を磨き鍛えてくれると思い、参加したかった。子供も小学生になり、平日の昼間、活動できるので、2年前から参加した。ホームステイ受入は困難なため、受入家庭とのネットワークづくりに努めている。顔の見える関係ができてくるのが楽しい。住んでいる町で、暮らしのなかで自然体で活動できることが、継続の支えになっている。

(2) ホームステイ委員は20人いるが、実際に活動しているのは10人ほど。夏休みには、児童の子持ちの委員は動きにくい。市内のホームステイ受入登録家庭は、ホームビジットを含めて140で不足している。春と秋に集中するため、何度も受け入れする家庭も出てしまう。ホームステイのニュースを流し受け入れを募る。郵送費、電話料金はU.I.F.A.からいただく。委員会がホームステイ先の家庭との応答はコーディネートし、プライバシー保持に万全を期している。

(3) ボランティア意識でやっており、金銭にはこだわらない。ただ郵送費などの実費は自己負担になると苦しくなる。プロではないことが、ボランティアのよさ。アマチュアイズムには、自由度が高い。時には帰宅が遅れ、家族の協力が大切。子供も親の背を見て、国際協力、ボランティアに関心を深めてくると期待している。

(4) 浦安市はマンションが多く、ホームステイのためのスペース不足が課題。1家庭になるべく1人と企画するが、2人になってしまうときもある。ホストファミリーの懇親会を年に数回開く。ホストファミリーどうしが仲よくないと、横の連携は進まない。懇親会をきっかけに、多方面での交わりが広がっている。

### IV-2-2 S.U.さんへのインタビューから

S.U.さんは、夫と90歳の姑と暮らす主婦である。U.I.F.A. 設立当初から参加し、現在は役

員を務めている。インタビューでは、次のことがわかった。

(1) 1955年ころ、国際学生会議に参加し、そのころから、アジアの留学生との交流を重ねた。結婚前、外国人観光の仕事に携わった。白人、黒人の区別なく、違和感なしに付き合った。語学が達者でなく、青年期を除き、職業にしなかったのがよかった。国際交流は言葉ではないと思う。結婚、出産、夫の転勤を経て、当地に定住した。U.I.F.Aができると聞き、ボランティア登録したのが、参加のきっかけ。姑の世話があり、行動を限られるなかでも、視野を広げたかった。外国人の訪問、住民どうしの輪の広がりうれしい。

(2) 夫は戦中派で、英語は苦手だし、ホームステイ受入は好きではない。昼間、会社で英語を話し、帰宅して、また英語の会話で夕食となると、くつろげない。だから、今夜、外国人が泊まるという日の朝は、「今夜はヨコ飯か」と夫は言う。しかし妻が国際交流を生きがいに行っていることに、協力してくれる。

(3) 姑は、アジア出身の留学生がホームステイしたとき、「怖い」と言って、自室から出なかった。留学生が帰る間際、「おばあちゃんにお礼を言いたい」と部屋を訪ねてあいさつすると、姑も心を和ませ、自分の俳句を見せた。留学生はお年寄りを大切に、姑を呼びに行ったりしてくれ、彼らとのふれあいから、姑の意識も開かれてきた。

(4) U.I.F.Aへ参加する女性たちには、社会性をもつ仕事をしたい人が多い。交流ボランティアをきっかけに、ネットワークを生かして就職する人もいる。ライフステージにより、活動スタンスは変わる。夫の反対で、ボランティアをやめた人はいない。会社勤務、自営の男性たちも、平日の昼はフルタイムの仕事で無理な場合でも、夜間、週末には、U.I.F.Aの会合に参加している。交流により女性たちの話題が豊富になり、男性たちにも楽しいようだ。

(5) ホームステイ受け入れは、小さな子供のいる家庭に勧めたい。肌の色、言葉はちがって

も、同じ人間ということ、子供はすぐに理解する。外国でメイドさんを使っていたような家庭は、受け入れは難しい面もある。ホームステイは、ふだんの暮らしのままで受け入れる。外国人に合わせる必要はない。日本のふだんの暮らし、文化を味わってほしい。

(6) U.I.F.Aに限らず、他のグループとのネットワークも広げたい。ホームステイ受入家庭は、文書PRのみでは増えない。クチコミで背後から支えたり、人間関係ができてこそ増える。U.I.F.Aが頼んでもダメで、市役所からだとかOKのケースもある。役所の権威が有効な場合もある。浦安で初めてホームステイ受入のときから慎重を期した。登録家庭をすべて回り、信頼関係確立に務めた。国際開発事業団からの依頼でホームステイ受入のときにも、「この外国人には、ここの家庭が合うのでは」と配慮を重ねた。事務的には決められない。

(7) カリスマ性の強いリーダーが引っ張る組織も他地域にはあるが、浦安はU.I.F.Aの役員も、相談は受けても指示はしない。運営は、各委の創意に委ねられる。委員会のリーダーが交替すれば、またゼロからの出発となる。リーダーにより、やり方は多様。国際交流には、単一の目的が具体的にある訳ではない。U.I.F.Aへの入会動機も様々で、コンセンサスを得るのが難と言え言える。

## V 外国人住民の暮らしと意識

### V-1 外国人住民の生活相談

1992年度、浦安市外国人相談窓口には、30か国の出身者から247件の相談があった。相談内容と対応についてみよう。

もっとも多かった相談は「医療と健康保険」である。英語の話せる医師の紹介、国民健康保険への入り方、保険料の支払い方法などである。第2に多いのは、入管、ビザ、外国人登録についてである。たまに不法就労者も来る。ビザの失効、入管に行くのが怖い、などの相談もある。相談者の秘密保持を貫く。日本人にはすべてを

話すのが怖くても、外国人アドバイザーは同じ立場だから、安心して話せる。

第3は、日本語を学びたいという相談である。負担の過重にならない月謝で、生活に支障のない授業時間帯の学校紹介を行う。

第4は、もっとも深刻な問題として、賃貸住宅の相談。「不動産屋に斡旋を断られた」、「敷金、礼金が払えない」、県営、市営住宅も空きがないなど問題は多い。外国人に親切な地域の不動産屋をマークし、できるだけ紹介している。第5は、子供の幼稚園、保育園、小学校などの教育相談。第6は、生け花、お茶、陶芸など日本文化を習いたいという相談だった。

### V-2 外国人相談アドバイザーM.S.さん

(エジプト出身)へのインタビューから

M.S.さんは、浦安市が外国人相談窓口のサービスを始めた1989年から、アドバイザーを続けている。日本人の夫と子供2人と、11年前から同市に住む。

U.F.R.Aが設立されるまでは、(1)市内の外国人人数人と集まりお茶を飲む、(2)東京まで出て、「外国人妻の会」に出る一ほかは、地域で外国人との交わりは少なかった。U.F.R.A. ができて、最初の集いに出席したら、20か国、30人ほどの外国人が参加した。自分たちの町で、外国人の会ができて感動した。日本人住民、市長、国際交流課の人も参加し、市も自分たちのことを考えてくれているのがうれしかったという。

アドバイザーとして、とくに印象に残る仕事は次の通りである。

(1) 子を幼稚園に入園させたくとも、母親は日本語、英語ともにできず困っていたため、同行してサポートした。日本語ができず英語がわかる母親のためには、幼稚園からの連絡を英訳してあげた。

(2) 海外からの新住民には、電気、電話、ガスの契約方法、税金の支払い方法、税金の多寡の理由を教えた。

(3) 結婚相談。外国人と結婚して、日本の法のもとで婚姻届けを出すことの相談。日本人の

娘が外国人と結婚することになり、外国人の実家への土産についての相談。

(4) 夫婦喧嘩などの家庭のトラブル。家庭の悩みについて話を聞いてくれる人を求めている。この他、文化のちがいなど、多様な相談に、根気よく対応している。

### V-3 外国人アドバイザー、M.Y.さん

(台湾出身)へのインタビューから

M.Y.さんは、日本人の夫と、娘と暮らす。インタビューによって、次が明らかになった。

(1) 中国、台湾から最近来た人々は、家主の偏見があり、アパート探しが大変。香港、マレーシア出身者も苦労している。アジアの人々が多く暮らす豊島区などを紹介している。

(2) 住居に困り抜いた外国人は、1DKに2人住むとか、仲間どうして固まり急場をしのぐ。

(3) 中国人が研修目的で日本へ来て、日本人の数分の一の賃金で働かされ、ケガをしたが、研修目的の就労のため、労災保険は受けられないケースがあった。社として補償すべきと申し入れたが、対応は冷たかった。

(4) 日本語ができず、日本で暮らすことに自信をもてない外国人をいかにサポートするか。いつも中途はんばなアドバイスしかできないのが気になる。もっと奥深く相談に答えたい。

M.Y.さんは、今後の課題点として、外国人住民のお年寄りが増えてくる。外国人の老後は、日本語を忘れたり、痴呆症になったとき、外国人ボランティアの助けがないと対応できないことを指摘した。

### V-4 外国人住民の多様な意識

ここでは、浦安市在住の外国人の人々へのインタビューから、社会意識をみたい。日本社会への入りこみ方で、「どこか冷たさがある」「世間話だけでなく本音でつきあいたい」「日本は規則が多すぎる。なぜ個人が責任をもち自由に生きないのか」の声も聞かれた。ハンガリー出身で17年前に来日し、日本人の夫と子供と暮ら

す女性は、次のように語った。「浦安市は外国人が多く、日本人も親切だ。ハンガリーに比べ、日本人はホンネを言う度合いは少ない。自分の心をすべて見せていい友人は、わずかしかない。団地に住み、共同の掃除、餅つき大会などの祭に参加し、団地自治会役員、PTA役員もしている。個人的には、うっとろしさもあるが、全体ではプラスになっている。一生、よそ者という気持もあり淋しいときもある。帰りたくとも帰る所はない。多分、骨は日本に埋める。日本人として生きようという気持と、ハンガリー人として生きたいという気持で揺れ動く。日本人になりきろうとすると、精神的におかしくなる」。

一方、日本人の妻と、子供がおり、来日10年、翻訳業の男性は、パスポートではヨルダン人だが、本当はパレスチナ人だという。「日本では、いい仕事は欧米人でないと難しく、第3世界から来た人々は大変だ。外人（ガイジン）と言って、仕事をくれない。市の制度融資で、コンピュータ購入の融資を頼んだが、日本人ならOKなのに、外国人のため困難だった。日本人は大好きであり、人間の心は国境を越えて同じ」だと語った。

## VI 調査データ分析

### VI-1 野に生きる素人主義

作業仮説をもとに、調査データの分析を試みたい。

国を越えて、生活者の日常には、他者との出会いと別れなど、喜び、悲しみ、感動、失意が交錯している。「人間はひとりでは生きてゆけない」という、ロビンソン・クルーソーの寓話は、共同存在としての人間の対等な関係に立つ協力の大切さを示唆していよう。

S.U.さんの姑が、ホームステイで訪ねたアジアの青年を、最初は怖がり、次第に共感関係をもつに至った過程は、象徴的ケースであろう。戦中派で、伝統的な静かな日本の暮らしを好む夫との折り合いをつけて、ホームステイ受入を

した家庭の営みは、しなやかな歩み寄りの意味を示していよう。

子育てしながら、ホームステイ・ネットワークに取り組むJ.S.さんの生き方は、「できるところから交流運動を」という生活者の無理のない協力の在り方を示唆している。

専門主義は近代の分業に対応したもので、生産性、効率は高まるが、専門化が進むほど、生身の人間の声は、社会の規範・コードにより抑圧される恐れはないだろうか。

### VI-2 日本人の生き方の可変性

U.I.F.A.は、「世界はお隣りどうし」を合言葉に、より身近な生活空間での市民主体の活動を続けてきた。多様な価値を抱く住民が集まっており、活動も多岐に渡る。日本人のまなざしが世界に開かれ、生き方の可変性、選択肢がひろがる時、日本の社会構造も草の根からつくり直されていくのではないか。

U.I.F.A.は、アジアの途上国での児童売春の実態などに関する講演会も開き、出席者からのカンパにより、講師がアフリカの難民援助に出發するなど、第3世界への国際協力にも取り組んできた。市内の教育機関に学ぶ留学生のためのバザーなども重ねられている。

言わば、U.I.F.A.は、「国際交流への招待」という水先案内の機能と、外国人住民を含めた地域ネットワーク形成機能を担っていよう。

U.I.F.A.の体験をもとに、海外の特定地域への国際協力をめざすNGOに飛び込む住民もいれば、経済協力を視野を開く企業家もいよう。

J.S.さんは、主婦・子育てだけの日々には満ち足りず、ホームステイ・ネットワークの開拓に携わる。交流活動に参加した主婦たちが、国際交流の企画・実施の体験などをもとに、新たに職業に一本・タイムであれ、パートであれ一ついていったという事実は、今後の調査研究で追跡したい項目である。

### VI-3 自治体との役割分担

浦安調査からは、地域立脚型の国際交流は、

市民が主体であること、自治体行政はパイプ役であり、市民参加促進の媒介機能を担うことの一部が検証されたと言えよう。浦安市は、外国人に住みやすい町の実現のため、生活、文化面の相談窓口機能を強化し、また米国の姉妹都市との交流促進に努めてきた。

国際交流に関する官民の関係は、異文化との共生、地域民主主義の在り方を照らし出そう。官尊民卑という言葉が象徴的なように、遅れて近代化に入った日本は、住民主権、住民参加と地域主権は大きな課題となっている。ホームステイの受入家庭の開拓で、市役所から口添えがあるとOKが出たというケースは、「官」の権威が根強いという日本社会の特徴を物語っている。

しかし、地域運動には、制度の壁を突き動かしていくプラグマチズム的な段階的運動論が必要であろう。

「官」を構成している人々も、無機物のオートマチック・マシンなのではない。「官尊民卑」とは、それを受容してきた社会意識とともに、中央集権を根源とする制度論からとらえられるべき問題であろう。市国際交流課のスタッフは、住民からの要望にできる限り応答しようとしていることが、浦安調査では、感じられた。(1)法律、条例の制度の壁についての研究、(2)制度の壁とは別に、官と民との協力関係、住民参加の実践的方法研究が今後の課題である。

#### VI-4 階層問題

国際交流は、異文化の火花が散り、相互の誤解や無理解から、一步一步、段階的に、意志の疎通、協力関係を模索していくものであろう。

浦安調査では、次のような声も聞かれた。

(1) 浦安のニュータウンは、高学歴で、収入が多く、経済的ゆとりのある住民も相対的に多い。活発な国際交流は、こうした階層的条件を背景にしていけないか。

(2) 生活が苦しく、余暇時間もお金もない住民は、国際交流に参加困難。

入管法で言う不法就労者などの、いわゆる「在日外国人」問題、日本内部の階層問題と国際化については、今後、研究を深めたい。ただし、社会問題を、階層論からのみとらえようとすることにはドグマのワナがあろう。

以上の(1)、(2)の階層問題については、「では時間とお金があるなら、ボランティアに参加するのか」という反証もできよう。

#### VII おわりに—参画型国際交流の展望

浦安市のU.I.F.A.の各委員会は、活動の企画、実施についての意志決定を、委員会のメンバーたち自らが討議を重ねて行ってきた。浦安市は、U.I.F.A.の事務局を国際交流課におくこと、年間800万円の補助金交付などの後方支援を積極的に進めているが、U.I.F.A.の進路を決めるのは、あくまで地域住民から構成される会員なのである。

一般会員1344人、学生会員120人、団体会員26団体(94年5月現在)からなる同組織は、地域の自立、第3世界との連帯に関して、これからの地域民主主義の在り方をも示唆している。

浦安調査からは、(1)国際交流とは住民一人ひとりの心に根差す草の根運動であり、市民が主体のものであること、(2)外国人住民の相談窓口の充実などの行政の国際化は、自治体の役割という役割分担が浮き彫りになった。調査では、高齢化社会の到来のなか、外国人住民の不安も明らかになった。

参画型交流への展望は、日本の町づくりにも通じている。「意志決定の権利」という住民主権の原理は、住民が、どこまで「結果責任」をも担えるのか、という厳しい問いを対のものとしている。



注

- (1) ここでの社会学的視座とは、第1は個人と社会との関係性を問う視点、第2は社会の自明性の背後を問う視点に重きをおく。本稿は、事実発見に主軸をおいたが、国際交流は、社会運動論の視点からとらえるとき、国を越えた友人作りから、社会を作り替えてゆく段階まで多段階の位相があろう。
- (2) 筆者は、浦安調査とともに、鹿児島県大隅半島でのカラモジア運動に関する調査研究を進めている。大都市近郊と、農業・農村を基盤として始まった国際交流との地域的な比較研究などを射程においている。渡辺【1994】参照。
- (3) 社会運動は絶えず生成、変容してゆくものであり、運動の分岐点をとらえて集中的な調査を図りたい。
- (4) 生き方の可変性に関しては、渡辺【1984】など参照。
- (5) 榎田氏は、国際協力に関心があっても、接点をもてなかった人々への配慮が大切であることを、体験に基づいて述べている。榎田【1994】参照。

文献

- 荒木美奈子 1992 『女たちの大地：開発援助フィールドノート』 築地書館
- Berger,P. 1974 The Homeless Mind,Penguin.
- ブラント委員会報告書 1980 『南と北一生存のための戦略』 日本経済新聞社
- 第3世界民衆フォーラム編 1993 『国境を越えるまなざし』 社会評論社
- 榎田勝利 1994 「国際交流と地域文化の助成」『現代のエスプリ』322号
- Freire,P. 1972 Cultural Action for Freedom. Penguin.
- 吹浦忠正 1994 『海外ボランティア入門』 自由国民社
- 福田 菊 1988 『国連とNGO』 三省堂
- Glasson,J. 1974 Regional Planning, Hutchison.
- Gran,G. 1983 Development by People, Praeger.
- 羽貝正美外編 1994 『自治体外交の挑戦』 有信堂高文社
- 原ひろ子 大沢真理編 1993 『変容する男性社会』 新曜社
- Harris, N. 1993 Cities in the 1990s, UCL Press.
- 秦 辰也 1994 『アジア発 ボランティア日記』 岩波書店
- 細谷 実 1994 『性別秩序の世界』 マルジュ社
- 石田雄 三橋修 1994 『日本の社会科学と差別理論』 明石書店
- 岩崎駿介 1989 『地球人として生きる』 岩波書店
- 開発教育協議会 1989 『開発教育－基本文献集』
- 開発とジェンダー研究会 1993 『開発プロジェクトにおけるジェンダー分析』（報告書）
- 勝間靖 小山敦史 1993 「開発の社会的側面に光を」『国際開発ジャーナル』4月号
- 経済企画庁編 1991 『日本の顔の見える自助努力支援を目指して』 大蔵省印刷局
- 毎日新聞社会部 1990 『国際援助ビジネス』 亜紀書房
- 松井やより 1985 『魂にふれるアジア』 朝日新聞社
- 松井やより 1990 『市民と援助』 岩波書店
- 松井やより R・ルプレヒト 1992 『NGO, ODA援助は誰のためか』 明石書店
- 民際外交10年史企画編集委員会 1990 『民際外交の挑戦』 日本評論社
- 村井吉敬編著 1988 『アジアと私たち』 三一書房
- 中島克己外編著 1992 『日本の国際化を考える』 ミネルヴァ書房

- 中村尚司 1989 『豊かなアジア貧しい日本』 学陽書房  
中田正一 1990 『国際協力の新しい風』 岩波書店  
日本平和学会編 1989 『市民・NGO運動と平和』 早稲田大学出版部  
Nyerere,J. 1968 Freedom and Socialism, Oxford U. P.  
Oakley,P. 1989 Community Involvement in Health Development, WHO.  
Oakley,P. 1991 Projects with People,ILO→勝間靖外訳 『国際開発論入門』 1993 築地書館  
小川雄平編著 1991 『アジア共生の時代』 同友館  
大沢真理 1993 『企業中心社会を超えて』 時事通信社  
坂本義和編 1983 『自治体の国際交流』 学陽書房  
Schumacher,E.F. 1973 Small is Beautiful,Abacus.→斎藤志郎訳 1977 『人間復興の経済』 佑学社  
市民の海外協力を考える会編 1985 『市民の海外協力白書』 日本評論社  
須藤章編著 1992 『いまどきの海外協力』 岩波書店  
隅谷三喜男他編 1983 『アジアの開発と民衆』 日本YMCA同盟出版部  
高瀬 浄 1993 『多様との共生』 日本経済評論社  
手塚和彰 1990 『労働力移動の時代』 中央公論社  
鶴見和子 川田侃 1989 『内発的發展論』 東大出版会  
浦安市編 1992-1994 『市勢要覧』各号 同市  
浦安市国際交流課編 1992 「姉妹都市オーランド市」 同市  
浦安市国際交流課編 1993-1994 「浦安市国際化の現況」(資料) 同市  
浦安市国際交流協会編 1992 『U.I.F.A.5年間の歩み』 同協会  
浦安市国際交流協会編 1993-1994 「UIFA News Letter」 30号までの各号  
浦安市国際交流協会編 1993 「1993年度総会資料」  
Verhelst,T. 1987 Des Racines Pour Vivre, Editions Duculot→片岡幸彦監訳 1994  
『文化・開発・NGO』 新評論  
渡辺 牧 1984 「翻身論序説」『ソシオロゴス』 8号  
渡辺 牧 1994 「草の根の国際交流から住民参加型の国際協力へ」 『国際開発研究』 第3巻  
渡辺龍也他 1993 「途上国における貧困問題解決にむけた『参画型』開発の研究」 外務省委託研究報告書  
渡辺利夫 草野厚 1991 『日本のODAをどうするか』 日本放送出版協会

— 文献挙示は《ソシオロゴス方式》による —